

ぬしは、その御時の(ははきさき)母后の宮の御方の召し使ひ、

高名の大宅世継とぞ言ひ侍りしかな。

されば、ぬしの御年はおのれにはこよなくまさり

給へらむかし。みづからか小童にて

ありしとき、ぬしは二十五、六ばかりの男

にてこそはいませしか。

と書ふめれば、世継、

「しかしか、さ侍りしことなり。さても、ぬしの

御名はいかにぞや。」と書ふめれば、

「太政大臣殿にて元服つかまつりしとき、『きむぢ

か姓は何ぞ。』と仰せられしかば、『夏

山となむ申す。』と申ししを、やがて繁樹と

なむつけさせ給へりしなど言ふに、

いとあさましうなりぬ。たれも、少しよろしき

者どもは、見おこせ、居寄りなどしけり。

あなたは、その御代の(帝の)母后の宮の御所にいた召使で、
名高い大宅世継と仰いましたな。

そうだとすると、あなたのご年齢は私よりたいへん
上でいらっしゃるのでしよう。私が小童で

あった時に、あなたは二十五、六歳くらいの一人前
の男性で

いらっしゃいました。」

と云つと、世継が、

「そつそつ、そつでございましたなあ。ところで、
あなたの

(元服後の)お名前は何でしたか。」と云つと、

「太政大臣殿のお屋敷で元服し申し上げた時、『お前

の姓は何というのか。』とおっしゃられたので、『夏

山と申し上げます。』と申し上げたところ、すぐに
繁樹と

(名前を)付けて下さいました」などと云つので、

たいへん驚きあきれてしまいました。誰でも少し身
分の優れている

人たちは、(こちらに)目を向け、座ったまま
寄ってきたりしました。